

## 令和3年度 hug くむ保育園長沼評価書

### I 経営の重点に関わる事 評価段階（A：大変良い B：まあまあ良い C：あまり良くない D：全然良くない）

1. 園教育（卒園目標）：社会に出ていく為の基礎ができた子 保育目標：「内面的安定」「自立心」「自律心」 育成目標：「自分の力で気づける子」「自分の考えが持てる子」「行動を繰り返せる子」			
重点目標	評価指標	評価	自己評価
社会に出ていく為の 基礎ができた子	特定他者との安定した愛着の形成がなされ、内面的安定が図られるよう向き合っている。	入園時や休み明け、体調不良時など、子どもが不安にならないよう担任を中心に職員間で連携を密にして関わっていた。	A
	人や物に関心を示し（気づき）探索活動の範囲を広げられるよう向き合っている。	年齢に応じた子ども達の興味に配慮した環境が作れるようになり、子ども達が自ら探索活動が広がるよう配慮できていた。	A
	探索活動の中での不安・怖れ、あるいは喜び楽しさを受け止め、内面の安定を図れるよう向き合っている。	探索活動の中で感じる不安や恐れの中で、子ども達と保育士がより強固な愛着が形成されるよう工夫できるようになってきた。	B
	「～したい」という、自らの考えを持てるよう子どもに向き合い、また子どもの考えをくみ取れるようにしている。（行動しやすいよう促している）	子ども達の自発性を促す為の活動提示や保育士からの言葉かけの工夫などが出来るようになってきた。また言葉以外の行動や家庭からの情報など総合的に子ども達の気持ちを汲み取る努力がなされてきた。	B
	行動によって生じた結果に対し、自己肯定感（自己有能感）を持つ事ができるよう向き合っている。	子ども達の「できた」に対し、具体的かつ身振りなど交えながら「褒める」事、「共感」する事などできていた。	A
	お友だちの気持ちに気づけたり、次の行動を見通すことができる促しをしている。	子ども達の気持ちを代弁する等、お友達の気持ちに気づけるような工夫をしていた。他者の気持ちを見通す感覚を発達の観点から保育に取り入れられると更に良い。	B
2. 保育方針			
評価指標	評価	自己評価	
根拠に基づく保育を実践します。	歳児毎にまとめてしまうのではなく子ども達一人一人、そして運動や心といったそれぞれの発達段階に視点を向けられるようになってきた。	B	
子ども自身の発達状況や個性を尊重します。	子どもたち一人一人の発達状況の違いに目を向け、活動時のグループ分けや遊び方への配慮など工夫がみられるようになってきた。	B	

子どもの目線・気持ちに立って子どもの行動を考えます。	「今、子供たちに何が見えているのか?」「何がしたいのか?」をまず考える習慣が出来てきた。その上で共感し分かりやすい言葉で伝えるといった声掛けにも変化が出てきた。	A
子どもの話しや想いを聴いた上で、伝え導いていきます。	一方的に大人の意図にのせたり、ルールを押し付けるのではなく、子ども達がどうしたいのかを聴いた上で伝える意識が見られるようになってきた。	B
「いいところ見つけ」を心がけます。	子ども達の日々の成長や、優しい気持ち、行動などを見落とさないようにする意識が習慣になっている。またそこから子ども達の自己肯定感を育つよう努めている。	A
やり方を教えるだけでなく、「やってみたい」「学びたい」という意欲も育みます。	遊びや身近な自発動作などにおいても子ども達の「やりたい」を引き出す工夫を言葉かけだけでなく、様々な仕掛け（教材）でもできていた。また職員間で話し合っってやり方を検討する場面も増えてきた	A

## II 施設機能に関わる事

大項目	中項目	評価指標	評価	自己評価
小規模保育施設における保育	発達の連続性を考慮した保育	0歳から3歳までの発達を理解し、子ども発達や実態に合わせて遊びの充実をしている。	発達を完全理解するには至っていないが学ぶ姿勢が増えてきた。また実際の保育場面において発達や実態に合わせた遊びの充実が出来てきた。	B
	一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	園児一人一人の生活や経験、発達過程を理解し、安定した穏やかな気持ちで園生活ができるように子どもの想いに寄り添い関わっている。	子ども達が穏やかに園生活ができるよう、朝の受け入れ時から活動、午睡などに工夫が見られた。また特に体調不良や環境の変化が合った子に対してはより注意深く寄り添う事が出来ていた。	A
	環境を通して行う保育	子どもの成長につながるよう考え、遊びの展開に応じて環境の再構成を工夫している。	環境構成は1年を通じたテーマであった。まだ環境の再構築などに課題があるが、研修等を通じて少しずつ向上してきている。	B
安全管理・指導	事故防止・防災	様々な状況を想定し、危機管理体制を職員全員で作成し、園児にも安全行動を身につける指導をしている。	保育中の事故を防止する工夫を頻りに話し合ってきた。新しい職員も多い一年であったが、月を追うごとに意識付け出来たと感じられた。また防災・防犯訓練を重ね、職員全員が非常時の動きについて向上してきた。実際の場面でリーダーシップが取れる人材を増やしていく事が課題。	B

保健管理 ・指導	生命の保持	<ul style="list-style-type: none"> <li>・安定した生活リズム（睡眠・食事・排泄等）の管理を行っている</li> <li>・「おいしく・たのしく・たべる」をテーマに、様々な形で食に関わる体験ができるよう工夫している。</li> </ul>	生活リズムの管理などは徹底して行っていた。しかし排泄のタイミングの記入漏れなどがあり、保護者からご意見を頂くことがあった。食については調理員と保育士の連携がしっかりできていた。	B
	健康教育の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>・園児の健康状態の把握に努めている</li> <li>・園児の発育・発達状況の把握に努めている。</li> <li>・園児に手洗い・うがい等の生活習慣を身につける指導をしている。</li> </ul>	連絡帳などを通じ、保護者と連携しながら健康状態・発達状況の把握が出来ていた。また新型コロナの影響もあるが、手洗いや・うがいに対する意識も今まで以上に強くなってきたと感じた。	A
特別支援教育	支援体制の構築	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全職員が園児一人一人の子どもを理解し、子どもの関わりに対し共通認識を持ち援助をしている。</li> <li>・特別な支援が必要な園児に対応するため、発達障害や病気、その他の特別な支援について、様々な知識の研鑽に努めている。</li> </ul>	全職員が園児一人一人の子どもを理解するには至っていないが、意識は高くなってきており、職員間の情報交換なども増えてきた。 病児も含め子ども達の体調変化など注意深く観察し支援できていた。発達的に特別な支援が必要な子どもに対してはその障がい特性などをより学んでいく必要があった。	B
組織運営	組織体制の充実	園運営（行事・保育・保護者対応など）について職員間で連携を取り合い、保育を進めている。	子ども達についてや行事、日々の保育については良く連携が取れていた。	A
研修	研修体制の充実	保育理念・目標・方針を実践に活かせる研修ができている。また実践に活かせる具体的な手立てや教材研究を行っている。	研修内容が実践に活かせる段階にはまだ至っていない。まず理念・目標・方針の意味をしっかりと理解する事が今後の課題でもある。	C
教育・保育環境の整備	教育・保育環境の充実	子どもが「楽しい」「またやりたい」と感じ、保育者自身も目的を持った環境や教材の工夫をしている	保育士が自ら考えた（意図を持った）教材を実際に保育場面で使用する機会が増えてきた。またそれが子ども達を非常に引き付けている場面もよく見られるようになってきた。	A
家庭との連携	家庭環境への支援機能の充実	保護者からの意見や要望、相談事を早目に解決できるように、保護者と職員が話し合いの場所をつくり、園からのおたよりを発行している。	保護者からのご意見等が速やかに現場から主任、園長へと挙がってくる報告体制が出来てきた。その結果、速やかに対応を協議する事が出来てきたが、建設的な意見を出せる職員が限定されていた。	B

連携園との連携	連携園との連携の推進	連携園に親しみを持って交流する機会を作っている。	昨年度に引き続き新型コロナウイルスの影響で交流をする事が出来なかった。今後、コロナ禍でも安心して交流できる手立てを検討していく必要がある。	C
地域との連携	信頼される園づくりの推進	園外保育や地域の多施設と交流し、近隣住民との触れ合いに努めている。	今年から園開放を実施、途中から予約制に変更する等、多くの地域の方にご利用いただけた。今後も地域に貢献できるような活動を検討していきたい	A

### III 園としての保育の総括

昨年度に比べ、子ども達の言動の意味を考えたり、個々の発達を意識した保育が出来てきた。また年間を通じて事例検討会を実施した事で子ども達の一人一人の理解が深まったり、環境構成や発達についての見識も深まってきたと思う。さらにフィンランド式キッズスキルを導入し保育の場面場面で解決志向で考える習慣が出てきたり、子どもとのコミュニケーションの取り方に工夫する意識が出てきた。今後、保育の中に本格的に導入していきたい。

記録・事故防止・防災など保育関連業務においても現場から意見を積極的に出してもらい改善の余地がある所は改善し、子ども達への保育、保護者へのサービス向上に努めていきたい。

### IV 園としての経営の総括

4月当初は園児8名でのスタートとなり、経営的にかなり厳しい状況であった。その為、園児募集について市からの紹介を待つだけでなく、保育の質の向上や看板設置などの広告の拡大、そして園開放による地域に開かれた活動を実践した。また既に在園しているご兄弟の入園が多いなど嬉しい事もあった。結果、園児数も着実に増え満床で年度末を迎える事が出来た。次年度もより保育・サービスの質を向上し、地域の方々に選んでいただける保育園を目指していきたい。